

水は三尺流るれば清くなる？



専務理事 土屋 進

梅雨明けも間近い7月上旬に現地調査に出かけました。

川幅は10m程の一級水系の一次支川ですが、約4km区間の河道を4時間かけて下りながら、瀬・淵、河畔林、周辺土地利用、更には魚類の生息等の状況を概略調査しようとするものです。

河畔林は土地利用との兼ね合いからその幅は薄くなっていましたが、瀬・淵も適当に配置され、魚種も多く本格的調査の対象になりそうな感触を得て安堵しました。

しかし、全行程の2/3程消化したところで、過年災の災害復旧工事と思われる河川工事の現場に出会いました。工事は最終段階の様相で、ブルドーザーによる河床整正中であり、ここより下流は三尺流れても濁水が澄むこともなく連続していて、瀬・淵調査、目視による魚類の生息調査は出来なくなり、調査精度は極端に悪いものとなってしまいました。

この工事は護岸や根固の工法から、いわゆる生態系に配慮した河川づくりを目指しているようでした。折角の多自然型河川づくりであるならば、河床整正の必要性、周辺河畔林伐採への配慮等、設計段階、施工段階で一寸踏み止まって、これまでの定型処理から脱却しようと努力することが大切であると勝手に感じたところです。試行錯誤の繰り返しによってよりよい河川づくりを目指しているとはいうものの、回避することが出来そうな失敗を繰り返すことは誠に残念なことと思います。

それでも河川整備は、目に触れる環境改善の指標の一つとして地域が強く意識する様になったこともあり、少しづつではありますが良い方向に変わりつつあると思われます。

一方、国民の多くに見えていない環境問題もあります。

世紀の変わり目ということなのか、経済や社会の再編が盛んに行われています。60億人を擁する地球の環境問題は20世紀の著しい発展の代償として様々な場面で大きな課題となっています。その態様は地球温暖化問題、フロンなどの地球環境問題、絶滅危惧種などをはじめとする生物に関する問題、生産活動に伴う環境負荷の問題、消費活動に伴う廃棄物の問題、これらが重層して人の健康にかかわる各種の環境問題等実に多面に及んでいます。

その中でも廃棄物対策は喫緊の課題です。我が国の廃棄物最終処分場の残容量は全国平均であと数年分しかなく、新規立地は各地ともきわめて困難な状況となっています。また不法投棄や燃焼時の有害物質の排出等は、何れは河川の水質汚濁の原因となり、特に有害化学物質の増加につながってくることになりそうです。

日本は国内資源が少ないので、製品原材料のほとんどを輸入に頼っていますが、年間約8億トンの製品原材料を輸入し、約1億トンを製品として輸出し、残り約7億トンが国内に溜っていきます。このうち約4億トンが廃棄物だと言われています。戦後の日本経済は大量生産、大量消費、大量廃棄の一方通行型の経済システムに支えられて発展してきました。これを支えてきた法制度等が、廃棄物の減量化、資源の有効利活用や環境保全等の循環型社会構築の視点から見直され、逐次整備拡充されてきています。廃棄物の最終処分は量的に膨大であることに加えて、搬入不適物の混入等最終処分場への不適正な搬入埋め立てや、処分場の不適切な維持管理等が目立つようになり、これによる地下水や土壌の汚染等への周辺住民等の不安が広がっています。

さらには廃棄物の不法投棄の問題があります。不法投棄量の90%近くが建設系の廃棄物ともいわれていますが、高度成長期に大都市を中心に急増した住宅やビルは、間もなく建て替えの時期を迎えます。30年後には首都圏の建築解体廃棄物の発生量は現在の五倍に増えるとの推計もあります。環境保全の観点から廃棄物を減らすためには再利用する方向に切り替えることが必要であり、容器包装や家電製品等順次法整備がなされてきています。建物解体は、建物ごと機械で壊す「ミンチ解体」が多いのですが、これを素材ごとにわけて解体する分別解体に変えないと再利用は出来ないのです。処理に要する費用は、適正処理を前提にすれば、再利用できる分別解体の方が安価とする新聞報道もあります。

再利用を促す為の手だてとしては法整備拡充はもとより、税制優遇措置を講じたり、再利用市場の活性化への助成、再生材を活用する技術開発などが考えられます。

水環境の最近の話題に環境ホルモン(内分泌攪乱化学物質)がありますが、平成10年度に建設省により河川での全国的な調査が行われ、今年3月にその結果が発表されています。それによりますと、環境ホルモンの疑いのある化学物質が調査地点のうち3~6割程度の地点で検出されたということです。今後は確認された化学物質がどのような経路で河川等に流入しているかを把握するための調査を実施していくことになっています。

日本人は綺麗好きと言われていますが、自分の身の回りの綺麗さの追求から、川下三尺などと言わずにもっと広い範囲にわたっての本当の綺麗さを目指す努力をしていけば、河川の生態系を痛めるおそれのない安全な水を得られる希望が出てくると思います。